

一八五三年、この年ペリーが四隻の黒船を率いて浦賀に来航し、江戸幕府に開港を迫った。東アジアに欧米の機械文明の波が押し寄せて来ていた。咸豊帝の名になじみは薄いだが、その妃のひとり西太后であったといえれば分かり易いであろう。最盛期と謳われた、康熙帝・雍正帝・乾隆帝の三代の御代から半世紀経ち、清朝に大きな陰りが見え始めていた。すでに阿片戦争により多額の賠償金を払わされただけでなく、香港という国土の一部を失う屈辱を味わっていた。さらに東南沿海部に起こった太平天国の乱は、漢陽、漢口、武昌などの主要都市を落とし北京をも窺うほどの勢いで、清朝の支配は危機に瀕していた。

山西省と内蒙古の国境地帯に延々と連なる万里の長城に築かれた殺虎口。城門を挟み二本の角のように城壁の上に建てられた二層の望楼が、果てしなく広がる乾いた丘陵地帯を見つめている。明代の北の守りのひとつとして、頑なに北からの侵入者を阻み続けてきたが、清朝の支配が長城を越えて蒙古の地に広がって以来、門は開かれ交易のため行き来する人々から税を徴収する関所が設けられていた。

## 第一章

一八五三年、殺虎口税関。

穀物を積んだ車、塩を積んだ車、駱駝などを含む長い長い隊商の列が入り口で滞っている。車隊や駱駝隊に挿してある鏢局（運送の護衛や邸宅の警備を行う職業）の鏢旗と屋号を記した旗が風にハタハタと音をたて、家畜の鳴き声と相まって殺虎口にももの侘びしさを添えていた。隊商とは別に、老人の手を引き幼い子を抱いた被災者たちの長い列もできている。小さなひげをたくわえた中年の税関吏が隊商に向かって大声で叫んだ。

「穀物は二十文（文はお金の単位）、塩は五十文、茶は五十文だ、ちゃんと並べ、押すな押すな！」  
一方では若いがつしりとした税関吏が、被災者たちに向かって声を囁らしてわめいている。  
「押すな押すな！ 男が一文、女と子どもは二人で一文だ！ さっさと払え、払わんと通れんぞ！」

隊商の列では、商家の番頭然とした男が馬に鞭をあてて前の方に割り込んでくると、大声で叫んだ。

「お役人様、どうして値が上がってるんです？ 穀物ならおとといは五文でしたよ、いきなり二十文とはどういうことですか？」

税関吏はじろりと男を睨み付けた。

「物を知らんやつだな。南方で長毛賊（太平天国軍）、が反乱を起こして絹や茶の道が輸送路が塞がれちまったんだ。残ったのはあんたら穀物や油や塩の商人と長城の北に逃れようと押し寄

せて来る被災民だけだ。お上は長毛賊征伐の兵を維持せにやららん。あんたらから取らなきゃ、一体誰から税金を取れって言うんだ？」

その時、被災者の列にいた老婆が、ボロ布のような服から大事にしまっておいた穴あき銭を取りだして、払うか払うまいかためらっているところへ、後ろの方にいた被災者たちがいきなり怒号と共に押し寄せてきて、辺りはたちまち混乱に包まれた。体格のいい税関吏もさすがに抑えきれなくなり、慌てて鞭を振り上げるとピシリピシリと乱れ打ちにした。

「押すな！ 押し寄せるな！ ちゃんと立ってろ！ でなきゃだれも通さんぞ！」

税関の前にある旅籠で、うつろな目を細めて呆然と一切を眺めていた乞食が、いきなり嘔れた声で歌い出した。

「西へ行こうよ、西へ……（山西民謡『走西口』）」

そばにいた旅籠のおかみが驚いて飛び上がったが、叱るでもなくむしろ憐れむように一瞥すると、関所の入り口に目を向けた。飛脚問屋の配達夫が手に局旗を挙げて馬を飛ばしてやって来る。馬も人も疲れきり、しとどの汗に濡れている。配達夫は官道をこちらに曲がって来るなりいきなり馬もろともにひっくり返った。

人々がどつとざわめいた。

「どうした？ 何事だ？」

老乞食も歌うのをやめて首をのびしてそちらを見やった。塩車の御者が二人、素早く駆けつけると、配達夫を馬の下から引きずり出し旅籠に連れ込んだ。旅籠のおかみもためらうことなくひきごに汲んだ水を慣れた手つきで配達夫の口に流し込んだ。三十がらみの配達夫はいかに

も年季を積んだ様子だったが、弁髪（頭髪の一部を編んで垂らし、他をそり落とす髪型）はほだけ髭はぼうぼうで、唇に泡を吹き憔悴しきっている。男はひきごの水を飲み干すと徐々に正気にかえり、ハツとして叫んだ。

「ここはどこだ？ おれの郵便袋は？」

配達夫を助け出した塩車の御者が郵便袋を持って来ると、送り状に目を留めて読み上げた。

「山西太原府祁県 喬家堡 喬家当主 致広様宛、大至急、三日以内に配達のこと。配達料二百文、速達料白銀五十兩（兩はお金の単位。白銀一兩＝銅約二千文 十九世紀当時）」

「白銀五十兩だっつて？」

旅籠を取り巻いていた人々がどよめき、口々に喧しく取り沙汰を始めた。塩車の御者は郵便袋を配達夫に差し出した。

「あんた、なにをそんなに急いでるんだい？ そら、あんたの馬、疲れ果てて死にそうになってるぜ？」

震える手で郵便袋を受け取った配達夫は、立ち上がって出発しようとしたが身体が言うことをきかない。立ちあがるなり「あっ」と声を漏らしてへたり込んでしまった。

「ちくしょう、どうしたらいいんだ？」

しっかりと郵便袋を抱きしめて思わず涙声になる。傍らにいた老人が尋ねた。

「そこに書いてある喬家つてのはまさか、まず復盛公ありて後に包頭城あり」と言われているあの喬家かい？ 包頭にその名も轟き、十一も支店がある復字号を経営している、あの喬家なのかい？」

配達夫はしばしためらうと涙をぐいとぬぐつてうなずいた。

「そうだ、その喬家だ。大変なことになっちまってるんだ」

言いながら立ち上がろうとあがく。

「行かないや。這つてでも祁県に行かないや！」

しかし必死で立ち上がったものの、すぐまたずるりと倒れ込んでしまう。旅籠のおかみが慌てて助け起こし、野次馬が口々に声をかける。

「あんたつて人は、そんな脚でまだ行く気なのかい？ どうやって行く気だい？」

手紙を持って来た塩車の御者が、しばし考え込む様子で尋ねた。

「なあ、兄さん、配達に五十兩もはさむなんて一体どんな急ぎの手紙なんだい？ 今時二十兩もありや、娘つこが一人買えるつてもんだ」

配達夫は涙をぬぐうだけで答えず、尚もぶつぶつとつぶやいている。

「何事つて、大事な事だよ、でも言えないんだ……」

人々は互いに顔を見交わし、ついに旅籠のおかみが口を開いた。

「ねえ、お兄さん、こんな所でべそかいてたつて何にもなりやしないだろ？ その脚じゃすぐには歩けやしないよ。こちらの塩車のお兄さんに頼む方がいいんじゃないかい？ あたしがこの人に速い馬を貸してやるからさ、その手紙、この人に山西祁県の喬家堡まで配達してもらいなよ」

塩車の御者はぼかんとした。

「おれが？」

しかし配達夫は聞くなりガバツと跪ひざまずいた。

「兄さん、頼む、銀子十両払うよ、いや、二十両だ。あさつての日没前までにこの手紙を届けてくれさえすりゃいいんだ！」

塩車えんしゃの御者はその気になりかけたようだ。それを見て野次馬たちがまた、ああだこうだと騒さわぎ出す。

旅籠はたごの門口に縮こまっていたさきほどの乞食の老人が、嗚しやがれた声で歌い出した。

「兄あさんは西に行く、おらには留められね、どうにも切なくて、涙なみだがぼろぼろ止まらねんだ……」  
 侘わびしい嗚しやがれ声は響き渡りはしなかったが、騒さわがしさの中にもなお荒涼とした気配をぬぐいきれない殺虎口ころここうに漂い、居合わせた人々全ての耳にずっしりと重く、あたかも痛みを伴うかのように届いた。やがて旅籠はたごのざわめきも静まり、曰く言いがたい郷愁きゆうしゆがひっそりと辺りを包んだ。